

現代日本語におけるアスペクトの研究の現状¹⁾

－ 基 本 的 ・ 派 生 的 ア ス ペ ク ト －

Maher ELSHERBENY

0. はじめに

現代日本語における「る」形、「た」形、「ている」形、「ていた」形というアスペクト表示形式（伝統的には、いわゆる「時の助動詞」）²⁾ は日本語を学ぶ外国人にとっては使い分けにくい。〔表1〕に示すように日本語とアラビア語におけるアスペクト表示体系の機能範囲は完全には一致しない。

〔表1〕

	日本語のアスペクトの形式			
	「る」形	「た」形	「ている」形	「ていた」形
日本語に対応するアラビア語のアスペクトの形式	yaf 'alu			
				または kāna ... yaf 'alu
	fa 'ala			

従って、本稿の目的は日本語を学ぶ外国人（例えば、アラブ人）のために現代日本語の文末動詞（文の後ろに来る動詞）³⁾ と結びつく「る」形、「た」形、「ている」形、「ていた」形の表す意味をアスペクト的観点から明らかにすることである。「アスペクトとは事象⁴⁾の時間的な内的構成を示す文法カテゴリーであり、動詞あるいは副詞などによって示されるものである」⁵⁾。筆者は先ず、「文末動詞」と結合する「る」形、「た」形、「ている」形、「ていた」形を「基本的アスペクト」と「副次的アスペクト」とに分ける。更に「副次的アスペクト」を「場面的アスペクト」と「派生的アスペクト」との二つに分ける。

1 基本的アスペクト

1.1 「る」形：「文末動詞」には、「る」形で使用される動詞（例：書く/ ある/・・・）

と使用されない動詞（例：優れる／・・・）がある。「る」形で使用される動詞は二つに分類できる。

①書く：私は彼に手紙を書く。

②*優れる：彼は優れる。

①は「未完了」を示している。「未完了」とは動作がまだ完了していないということを指すものであるが、その動作がまだ始まっていないか、始まったがまだ完全に終わっていないとの二つの解釈が可能である。この場合、「未完了」(Imperfective)は「動作開始以前」のことである。「読む」「泣く」「歌う」「聞く」「食べる」「飲む」「泳ぐ」「働く」「動く」「死ぬ」「点く」「消える」「止まる」「終わる」「出発する」「到着する」はその例である。このような動詞を「動作性動詞」と呼ぶことにしよう。

③ある：机の上に本がある。

③は「状態」(Stative)を示している。「状態」とは動きのないことである。「いる」「おる」「ござる」「(possible) できる」「切れる」「(理解の) わかる」がその例である。これらのような動詞を「状態性動詞」と名付けることにする。この場合「る」形と違って「幅」を持っている。「動作開始以前」を図で表すことはできたが、「状態開始以前」を示す図を作成することはできない。この点が、「る」形を伴った「動作性動詞」と「状態性動詞」におけるもう一つの違いである。つまり、「る」形で使用される動詞は「動作性動詞」(Movement verbs group)と「状態性動詞」(Stative verbs group)との二つに分類できるが、これらの2種に更に下位分類を行う必要はないと思われる。従って、「未完了相」(特に動作開始以前)と「状態相」(特に現在の状態)の二つの意味が「る」形の「基本的な意味」と見做すことができる。

1.2「た」形：文末において「た」形で使用される動詞（例：書いた／あった／・・・）と使用されない動詞（例：*優れた／*そびえた／*才気走った／*似た／*丸顔をした／・・・）が形の上で分類されるであろう。

④*優れた：*彼は優れた。

⑤書いた：私は彼に手紙を書いた。

⑤は「完了」(Perfective)を示している。「完了」とは、動作が完全に終わったことである。「る」形を伴った動詞を「動作性動詞」と「状態性動詞」との二つのグループに分けたように「た」形も同じく「動作性動詞」と「状態性動詞」に分類できる。⑤の「動作性動詞」は「完了」を示す。しかし、「た」形については次の二つの事に注意しなければならない。

その1. 例えば、晴れの天気が続いた後で、雨が降り始めた瞬間次のような発話が可能である。

⑥あ、雨が降った。

この場合の「降った」は「降り出した」、「降り始めた」、「降りかけた」、「降って

きた」とは異なる。「降り出した」は「急に」、「降り始めた」は「まだ続く」、「降りかけた」は「途中で止んだ」、「降ってきた」は「良かった(又は悪かった)」のようなニュアンスが含意されているが、ここの「降った」はそのようなニュアンスが含意されていない。つまり、話者は発話時(降っていること)を問題にしていないので「降った」は話者の期待していた状況が実現されたことを「完了」によって表現している。

その2「た」形は動詞に付くと、アスペクト的な意味と同時にムード的なニュアンスを持つことがある。安藤貞雄氏(1987)は次の例が「ぞんざいな命令」を示すアスペクトと見做しているが、筆者は「命令法」のサブ・カテゴリー(Subcategory)として、ムード的なニュアンスを含むと考えている。

⑦どいた、どいた。

⑦が「どいてください」の意味であれば、「語用論的命令」を意味していると思われるが、「どく」という動作が完了した場面を想定しているのであれば、勿論、アスペクトである。

⑧あった：机の上に本があった。

即ち、「た」形は、「動作性動詞」と結び付いた際には「完了相」(特に動作終了以後)を、「状態性動詞」に付いた場合は「状態相」(特に過去の状態)」を指し示す。換言すれば、「た」形で用いられる動詞は「動作性動詞」と「状態性動詞」で表すアスペクトが異なることになる。

1.3 「ている」形：これについては数多くの論文が書かれているが、これらの中で金田一春彦氏(1955)と奥田靖雄(野村政雄⁶⁾)氏(1977)が重要であると思われるので、これらに簡単に触れておこう。金田一氏は「ている」形が動詞に付けられるか、付けられないかという観点から日本語動詞を四種に分類した。第一種、「ている」形で用いられない動詞(状態性動詞 例「いる／ある／・・・」)、第二種、「ている」形で使用される動詞(継続動詞 例「食べる／飲む／・・・」)、第三種、「ている」形で使える動詞(瞬間動詞 例「開く／点く／・・・」)、第四種、「ている」形のみで使える動詞(第四種の動詞「例：そびえる／すぐれる／・・・」)と氏はしている。しかし、金田一の論文には問題がないとは言えない。例えば、氏は動作の継続時間の長さから考えて第二種と第三種の区別を立てている。つまり、「雨が降っている」の「降る」は時間内続くのを常とするから「継続動詞」とし、「電燈が点いている」の「点く」は「瞬間動詞」で「点いている」はその結果を表している。しかし、時間の長さを規準にして動詞を分類することには問題点がある。例えば、「来る」「行く」「帰る」「入る」はその例である。そこで、奥田氏は「動作の継続」と「変化の結果の継続」というふたつのアスペクチュアルな意味の対立は、決して動作の《時間的な量》のちがいではないのだが、「継続動詞」と「瞬間動詞」とは、これらがさしめず動作の《時間的な量》における対立物なのである」と指摘した。奥田によれば、「る」形と「ている」形の対立的関係を持っている動詞(例：「はなしている」対「はなす」／「かいている」対「かく」／「あるいている」対「あるく」／・・・)はア

スペクト動詞であり、「ある」「いる」「そびえる」「あふれる」のような動詞にはアスペクトがかけられているので、アスペクトの研究の調査対象からはずさなければならないと主張している。しかし、これらの動詞にアスペクトがかけられているならば、一体どのような文法的ないし意味的機能をもつと考えるのであろうか。また、奥田氏は「る」形と「ている」形の対立的関係を持っている動詞をアスペクト動詞としてこの二つの形式にのみ着目しているが、「た」形と「ていた」形を無視している。筆者はアスペクトがかけられている動詞とかけしていない動詞との区別を立てず、これらの動詞をも研究の対象とする。

⑨書いている：私は手紙を書いている。

⑨のみを文脈から除外して見れば、これがどのようなアスペクト的意味を示すかは明確ではない。それは一つ以上の意味（例えば：未完了相または結果相）が考えられるからである。「読む」のような動詞を『新明解国語辞典』で調べると四つの意味が書かれている。これらの中の(1)書かれている文字の音を声に出す「経を読む」、(3)現れている事柄から深い意味を察知したり、将来の動きを推測したりする「相手の心を読む」という二つの意味を対比すれば、(1)は元の意味であり、(3)の意味は(1)の意味から派生したと解釈できる。(1)は「基本的意味」、(3)は「副次的意味」と考えれば、アスペクトも「基本的なもの」と「副次的なもの」とに分けられると思われる。従って、⑨のような動詞の示す「現在の未完了」は「基本的なアスペクト的意味」とする。しかし、ここの「未完了」は「動作中」のことである一方、「る」形を伴った「動作性動詞」の場合の「未完了」は「動作開始以前」のことである点で異なる。つまり、「ている」形で使える「書く」の他、「読む」「泣く」「歌う」「見る」「聞く」「食う」「吸う」「働く」「勉強する」「揺れる」「泳ぐ」のようなatelic動詞は「ている」形と結合された場合、「現在の未完了」を示す「動作性動詞」である。「蹴る」もこの動詞グループに入る。

⑫子供が石を蹴っている。

⑫「動作の反復」（仁田(1989)の言葉を使えば、「動きの最中」）を表すので、「継続的動作動詞」に入れる。これらのような動作を示す動詞は「継続的動作動詞」と呼ぶことにする。

「点く」「死ぬ」「消える」「触る」「離れる」「決まる」「見つかる」「覚める」「止まる」「始まる」「終わる」「出発する」「到着する」「止む（雨など）」「結婚する」「卒業する」「忘れる」のような動詞は「ている」形で使用されると、動作が終わった後（動作終了以後）のことが問題になる。つまり、動作が起って、完全に終わったが、その動作が結果をもたらし、もたらされた結果は続いていることを意味する。これを「現在の結果の継続」を呼び、これをも表す動詞を「継続的結果動詞」と呼ぶことにしよう。

⑬点いている：電灯が点いている。

金田一に挙げられている「ている」形のみで使える動詞（実際には「る」形または「た」形でも使える場合がある。例えば：アメリカは資源に富む／彼はにやけた）の他、砂川万

里子の分類で取り上げられた「関係動詞」（「位置する／似合う／該当する／相当する／匹敵する／ともなう／かねる／もとづく／ちがう／異なる／（数万に）のぼる／・・・」）と「存在動詞」（「存在する／実在する／有する／含む／属する／占める／・・・」）も「ている」形をとると、「現在の状態の継続」を示す。「状態の継続」を示す動詞を「継続的状态動詞」と呼ぶことにする。

⑭優れる：田中さんは特に英語が優れている。

1.4 「ていた」形：「ている」形は「現在」と関わりがある一方、「ていた」形は「過去」と関連を持つという点のみにおいて両形式は異なるに過ぎない。そのゆえに、筆者はこの二つの形式は、「ていた」形に関しては短く述べるに留める。「ていた」形をとった「継続的動作動詞」は基本的に「過去の動作の継続」、「継続的結果動詞」は「過去の結果の継続」、「継続的状态動詞」は「過去の状態の継続」を示す。

⑭書いていた：私は手紙を書いていた。

⑮点いていた：電灯が点いていた。

これまで、「る」形、「た」形、「ている」形、「ていた」形と結合した「単純動詞」および「複合動詞」の「基本的アスペクトの意味」を探ってきた。それを本稿末の〔表2〕にまとめておこう。

2 副次的アスペクト

以上、動詞自体の持っている語彙的な意味を考慮しつつ、動詞分類と動詞に付く「る」形、「た」形、「ている」形、「ていた」形を考えてきた。「副次的アスペクト」とは動詞自体の持っているアスペクトのことではなく、文脈的（脈絡的）なレベルで現れるアスペクトのことである。それを「派生的アスペクト」と「場面的アスペクト」との二つに分けることにする。「場面的アスペクト」は（時の）副詞が動詞に伴なわれた場合に見られるアスペクトのことである。次例⑱と⑲はそれぞれ「基本的アスペクト」と「場面的アスペクト」を対比したものである⁸⁾。

⑱a: 有名な人が死んでいる。⑱b: アメリカに行っている。

⑲a: 有名な人がどんどん死んでいる。⑲b: 来週はアメリカに行っている。

これに対して、「派生的アスペクト」とは、動詞にアスペクト的影響を及ぼす副詞はないが、アスペクト的影響を及ぼす他の文要素（成分）があるもののことである。しかし、派生的アスペクトは文脈によって意味が無限に存在するので、筆者はここで数例を挙げるに留めておく。

2.1 「る」形：次に見られるように「真理」、「規則」、「説明」、「フラッシュ・バック(Flash Back)」、「ことわざ」、「習慣・慣習」を示す場合に「る」形が使用される。

「真理」：「真理」とは、自然的なきまりのことである。例えば、太陽が東から上ることとは人間の能力を越えた自然現象である。「真理」はいつからいつまで続くということが

ないので時の分割（過去、現在、未来）を越えたものである。

⑳太陽は東から上り、西に沈む。

「規則」：「規則」というのは、人間が考察し定めた「ルール・法」のことである。例えば、日本の道路が左側通行であるということは日本人が決めたルールであり、運転者はこのルールに従うことが期待される。即ち、「真理」と「規則」の違いは前者は自然の摂理であるのに後者は人間が定めたものであるという点に存する。

㉑日本では、車は左側を走る。

「説明」：これは物の作り方、使い方、組み立て方を説明する場合である。例えば、商品の説明書に書かれた作り方、食べ方、組み立て方、使い方などである。

㉒ふたを半分まで開き、スープを取り出す。スープを入れて、熱湯を線まで注ぐ。
（うどんの食べ方）

「フラッシュ・バック(Flash Back)⁹⁾」：これは文学、映画、芝居などにおいて、過去に起こった事象を、現在の事象の如く表現することである。

㉓・・1042年のエドワード篤信王の即位と共に、ノルマン語の影響が始まる。

さて、「フラッシュ・バック」とそれ以外の「派生的アスペクト」（真理、規則、説明）の違いは次の点にある。後者の場合は、時の分割（過去、現在、未来）は問題になっておらず、それを越えているが、「フラッシュ・バック」の場合、「過去」に起こった「事象」のみに限られている。

「ことわざ」：「ことわざ」は人々の生活の知恵から生まれ、いつからともなく言いならわされてきた、教訓や批判をふくむ短いことばである。

㉔おぼれる者はわらをもつかむ。

「習慣・慣習」：「習慣」とは、個人的行動面の特徴 (Habit) であり、「慣習」というのは、社会的ならわし (Custom) である。

㉕彼は酒を飲む。（習慣）

㉖日本人は箸で食べる。（慣習）

ただし、㉕は「これから彼は酒を飲む」という「基本的アスペクト」をも持ちうる。

2.2 「た」形：「た」形は派生的アスペクトとして持ち得ない。

2.3 「ている」形：「ている」形と結合した場合、「継続的動作動詞」は基本的に「現在の動作の継続」を、「継続的結果動詞」は「現在の結果の継続」を示すことはすでに述べた。両者は「動作性動詞」であるので、「継続的動作動詞」も、「継続的結果動詞」が基本的に持っている「結果の継続」を派生的に示すことができる。たとえば、

㉗彼は酒を飲んでいる。

これは「今、飲んでいるところ（最中）」の意味であれば、「現在における動作の継続」であるが、「酒を飲んだので、今、酔っぱらっている」の意味であれば、「現在における結果の継続」である。前者の意味は「継続的動作動詞」の「基本的アスペクト」、後者は

その「派生的アスペクト」と考えられる。

2.4 「ていた」形：「継続的結果動詞」が「ていた」形と結合すれば、基本的に、「過去の結果の継続」を示すが、派生的に「過去の動作の継続」を示すこともできる。例えば、

㊸彼はドアを開けていた。

は「過去に起こった動作の過去の結果」を示しているが、「過去に起こった動作」をも示し得る。これは「継続的結果動詞」の中で「意志性動詞」の場合だけに限られている⁹⁾。

「意志動詞」でない場合、たとえば、

㊹ドアが開いている。

のような例はひとつのアスペクト的意味である「過去の結果の継続」しか示し得ないのである。これらの派生的アスペクトをまとめたものを、〔表3〕として本稿末に掲げておこう。

3 結語

アスペクトを「基本的なもの」と「副次的なもの」とに分け、更に「副次的アスペクト」を「派生的なもの」と「場面的なもの」との二つに分けた。「基本的アスペクト」の場合、「る」形を伴った動詞は「動作性動詞」と「状態性動詞」に分けられ、前者は「未完了(特に動作開始以前)」を、後者は「現在の状態」を示す。「た」形で使える動詞も同様に分けられ、前者は「完了(すなわち動作終了以後)」を、後者は「過去の状態」を示す。「ている」形で使用される動詞は「継続的動作動詞」と「継続的結果動詞」と「継続的状态動詞」との三つに分けられ、最初のものは「現在の動作の継続」を、二番目のものは「現在の結果の継続」を、最後のものは「現在の状態の継続」を示す。「ていた」形を伴った動詞は「ている」形で使える動詞と同じような動詞分類がなされ、最初のものは「過去の動作の継続」を、二番目のものは「過去の結果の継続」を、最後のものは「過去の状態の継続」を示す。「派生的アスペクト」の場合、「る」形は「真理」、「規則」、「説明」、「フラッシュ・バック(Flash Back)」、「ことわざ」、「習慣(Habit)・慣習(Custom)」を示す。「ている」形の場合、「継続的動作動詞」は「現在の動作の継続」を、「ていた」形の場合、「継続的動作動詞」は「過去の動作の継続」を、「継続的結果動詞」でかつ「意志動詞」は「過去の動作の継続」を示す。「場面的アスペクト」については、別の機会に問題にすることにしよう。

以上見たような四つの形式が、アスペクト的観点からどのように相互に対立しているのかを図示するならば、本稿末の〔表4〕のようになろう。

以上から考えると、次のような結論が導き出される。日本語は、セム系言語と同様に固有のテンス表示を持たず、アスペクトを軸とする言語で、テンスは文脈により、副次的に理解される。アラビア語を母語とする筆者には⑦ではムードのニュアンスが読みとれ、本稿末の〔表5〕(状態性動詞の場合)ではテンスのニュアンスも読みとれるが、根本的に

日本語はアスペクトのみの言語として考えるべきであると思われる。

本稿を終えるにあたり、暖かい御指導を頂いた吉川守先生、古浦敏生先生、今田良信先生、言語学研究室の皆さん（特に犬塚優司氏、橘孝司氏）に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 本稿は（1989年）広島大学大学院文学研究科（言語学）に提出した修士論文『日本語のアスペクトの研究』の一部を要約し、加筆訂正したものである。
- 2) 例えば、小林好日(1927)、佐久間鼎(1936)。
- 3) ここでは、文末以外の位置に来る動詞は問題にしないことにする。
- 4) 事象は動作または状態を示すものである。
- 5) この定義はBERNARD COMRIE (1976) に近いものである。
- 6) 奥田靖雄と野村政雄という名前は同一人物の名前である。
- 7) 「意志性動詞」で過去の動作の継続を示すには、「・・・つつある」が用いられるであろう。
- 8) 本稿においては、場面的アスペクトについてはさまざまな問題があるが、紙面の都合でこれ以上深く詳述しない。
- 9) いわゆる歴史的現在。

参考文献

BERNARD COMRIE: ASPECT. Cambridge University Press(1976)

安藤貞雄 : 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店、第二版(1987)

奥田靖雄 : 「アスペクトの研究をめぐる」上下『教育国語』54号

—— : 「アスペクトの研究をめぐる — 金田一的段階 — 」『ことばの研究・序説』(1984)

金田一春彦 : 「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房(1976)

—— : 「日本語動詞のテンスとアスペクト」(同上)

—— : 『新明解国語辞典』第三版三省堂(1981)

砂川有理子 : 『日本語文法セリフ・マスター・シリーズ2 する、した、している』くろしお出版(1987)

仁田義雄 : 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店(1989)

吉川守 : 「シュメール語の動詞におけるtelic/atelicの対立について」、『オリエント学論集』奨学館(1985)

(表2)

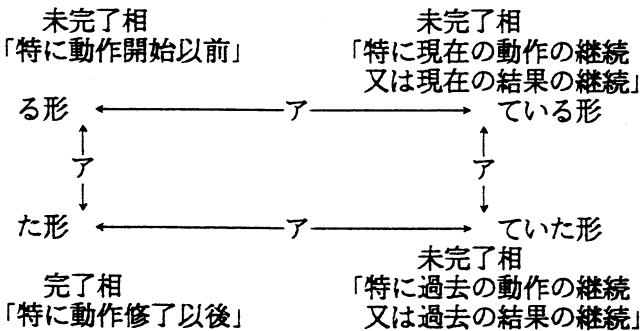
		アスペクト形式の使用可能・不可能の別	形式的動詞分類	意味的動詞分類		動詞例	アスペクト
アスペクト形式	る形	可	単純動詞	動作性動詞		書く、歩く、走る、食べる、歌う、吸う、泳ぐ、働く、刈る、滑る、掃く、死ぬ、点く、消える、覚める、止まる、触る、決まる、忘れる、始まる、終わる、等	未完了相 特に動作開始以前
				状態性動詞		居る、ある、ござる、(居るの) おる、(居るの) いらっしゃる、(可能の) できる、切れる、話せる、見える、値する、似合う、該当する、相当する、存在する、実在する、匹敵する、伴う、兼ねる、基づく、異なる、含む、属する、占める、有する、含む、等	状態相 特に現在の状態
						*優れる、*そびえる、*おもだつ、*すばぬける、*ばかける、*ありふれる、*丸顔をする、等	
		不可		動作性動詞		書いた、歩いた、走った、食べた、歌った、吸った、泳いだ、働いた、刈った、滑った、掃いた、降った、揺れる、死んだ、点いた、消えた、覚めた、止まった、触った、決まった、忘れた、始まった、終わった、直った、止んだ、出発した、到着した、失う、等	完了相
				状態性動詞		居た、(居たの) おった; いらっしゃった、あった、ございました、等	状態相 特に過去の状態
						*優れた、*そびえた、*おもだつた、*すばぬけた、*ばかける、*ありふれる、*丸顔をする、等	
	ている形	可	複合動詞	動作性動詞	継続的動作動詞	書いている、歩いている、走っている、食べている、歌っている、吸っている、泳いでいる、働いている、刈っている、滑っている、掃いている、降っている、揺れている、燃えている、縫っている、等	未完了相 特に現在の動作の継続
					継続的結果動詞	死んでいる、点いている、覚めている、触っている、見つかった、消えている、決まっている、忘れている、終わっている、結婚している、到着している、出発している、到着している、等	結果相 特に現在の結果の継続
				継続的状态動詞		位置している、似合っている、該当している、匹敵している、伴っている、兼ねている、基づいている、存在している、実在している、有している、含んでいる、属している、占めている、優れている、そびえている、おもだっている、丸顔をしている、等	状態相 特に現在の状態の継続
						*居る、(居るの) *おる; *いらっしゃる、*ある、*ござる、(可能の) *できる; *切れる; *話せる; *見える、等	
		不可	継続的動作動詞		書いていた、歩いていた、走っていた、読んでいた、笑っていた、泣いていた、歌っていた、食べていた、吸っていた、働いていた、動いていた、等	未完了相 特に過去の動作の継続	
			継続的結果動詞		死んでいた、点いていた、見つかった、消えていた、触っていた、決まっていた、覚めていた、忘れていた、終わっていた、結婚していた、到着していた、出発していた、到着していた、等	結果相 特に過去の結果の継続	
			継続性状態動詞		位置していた、似合っていた、該当していた、匹敵していた、伴っていた、兼ねていた、基づいていた、存在していた、実在していた、有していた、含んでいた、属していた、占めていた、すぐれていた、そびえていた、おもだっていた、丸顔をしていた、等	状態相 特に過去の状態の継続	
					*居た、(居たの) *おった; *いらっしゃった、*あった、*ございました、(可能の) *できた; *切れた; *話せた; *見えた、等		

〔表 3〕

アスペクト形式	形式的動詞分類	意味的動詞分類		派生的アスペクト
「る」形	単純動詞	動作性動詞		真理・規則・説明・ フラッシュバック・ ことわざ・習慣・慣習
		状態性動詞		
「た」形		動作性動詞		
		状態性動詞		
「ている」形	複合動詞	動作性動詞	継続的動作動詞	現在の結果の継続
			継続的結果動詞	
		状態性動詞		
「ていた」形		動作性動詞	継続的動作動詞	
			継続的結果動詞	過去の動作の継続

〔表 4〕

動作性動詞の場合



〔表 5〕

状態性動詞の場合

